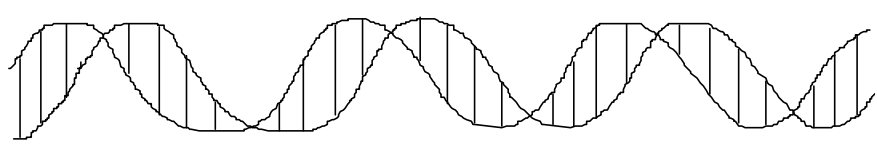
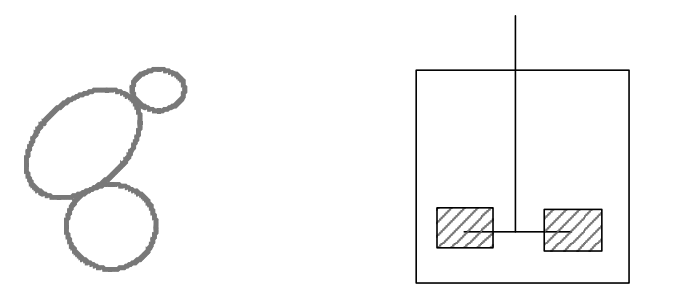


同窓会会報

第2号



大阪大学工学部
 醸造・醗酵・応用生物工学科
 同窓会
 平成11年9月

同窓会開催のご案内

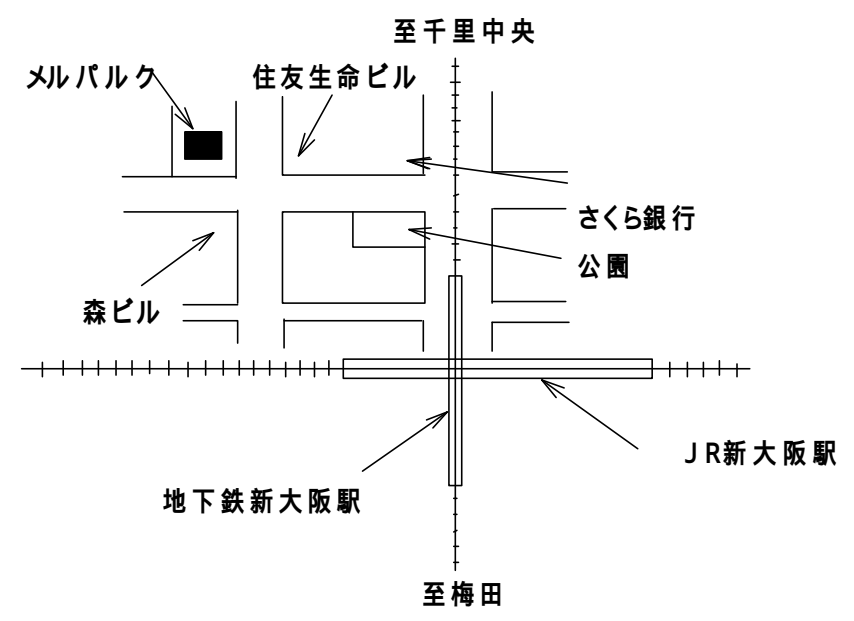
日時 平成11月12日(金)
 同窓会総会(午後4時~5時)
 講演会(午後5時~6時)
 懇親会(午後6時~7時)

場所 メルパルク大阪(新大阪駅すぐ、下図参照)
 (電話06-6350-2111)

会費 1万円

講演者 国立循環器病センター研究所・薬理部
 室長 高木敦子 昭和59年博士課程卒業
 [生活習慣病のテーラーメイド予防(個々人に合った予防)]
 小林肇 現博士課程1年
 [大阪大学-KAIST合同シンポジウムに参加して]

出欠を同封の用紙にてFAXまたは郵送でお知らせください。



活気ある同窓会を

-----目次-----

活気ある同窓会を	嶋谷幸雄	1
醸造・醗酵・応用生物学教室の動向	原島俊	2
教室の構成		4
生活習慣病のテーラーメイド予防（個々人にみあった予防）	高木敦子	5
気質に関する一考察	奥田慶一郎	6
KAISTとの学生交流	吉田敏臣	7
大阪大学-KAIST合同セミナーに参加して	小林肇	9
同窓会会則		15
会員の動向		16
平成11年3月卒業、修了生進路		17
クラス会幹事		19

同窓会副会長 嶋谷 幸雄（昭和29年卒）

昨年11月の同窓会には和田・松中両先生による学識と刺激に富んだご講演、そして飲・食・話題の豊かなパーティーで大成功でした。

同窓会活動は当日に人が集まればいいというものではなく、親睦と同時に教室の発展に平常から関心をもっていていただくことが肝要でありましょう。幸い当会は、醸造、発酵、応用生物の変遷を自ら体験され、人一倍同窓会に愛情をもち続けてこられた芝崎会長と、同窓会活動を学科に連動したものとして献身的にご努力頂いている現先生方の力があります。

今後の同窓会活動は、特に応用生物への改称と分野の拡がりがあるため努力なしでは継続性は難しくなるでしょう。従って同窓会は旧き交友の場であると同時に、若い卒業生諸君の活気を持ち込む場とする工夫が必要でしょう。この会が一つの有力な情報交換の場となり、先輩・後輩を越えて心置きなく交友できる楽しい場になればと願っております。



醸造・醗酵・応用生物学教室の動向

ー 21世紀のバイオテクノロジーを担う新しい発展に向かってー

応用生物学専攻・専攻長・原島 俊（昭和47年卒）

4年間に渡って行われた大阪大学工学部の大学院重点化が昨年で完了し、本年（平成11年度）は、全ての専攻が大学院の専攻として揃踏みした最初の年となりました。

母校の組織の変化については、既に色々なところで御存じかとも思いますが、なおわかりにくいという同窓生の皆様のご意見もお聞きしますので、この機会を利用して、今一度、御紹介をさせていただきます。我が教室の現在の正式名称は、大阪大学大学院・工学研究科・応用生物学専攻となり、教員は全て大学院の組織に所属することになりました。学部のレベルでは、工学部は4つの大学科（応用自然科学科、応用理工学科、電子・情報・エネルギー工学科、地球総合工学科）に分かれ、教官は大学院から学部に出向いて教育に携わるということになっています。新入生は、約250名定員の応用自然科学科として募集し、2年次に進級した時、成績と希望によって、応用化学コース、応用生物学コース、精密科学コース、応用物理学コースの4つのコース（正式には学科目）のいずれかに配属される制度となっています。幸いにも、応用生物学コースは、1番人気で、ここ数年、約60名の定員に90名程の希望者があるという難関です。

教官人事の面では、しばらく空席であった生命反応工学講座細胞生理学領域の教授として、10月に農林省北陸試験所から福井希一先生（京大農）が赴任され、教室のスタッフ（別表）も益々充実致しました。福井先生には昨年11月に行われた同窓会でご挨拶をして頂きましたので、同窓会に参加をされた方々は既に御存じかと思いますが、同窓会報が9月に発行されたため記事としては掲載されておらず、本稿を借りてご紹介をさせて頂きました。また10月には、

根来誠司先生が姫路工業大学に教授として赴任され、同窓生として、今までにも増して御活躍をして下さっているところです。

昨年より、2年次で応用生物学コースに進学した学生に、早い時期から同窓会の存在を知ってもらい、母校の教室にも愛着を持ってもらおうと、教職員との懇親会を始めました。本年も、5月に芝崎勲先生（同窓会長、昭和18年卒）と嶋谷幸雄会員（昭和29年卒）に来て頂き、教室100年の歴史、教育や研究の現状、学生時代から就職、そして現在にかけての貴重な御経験などをお話し頂き、その後、おいしい料理とともに有意義な懇親の時を過ごしました。

8月の始めには、昨年から始めた大学院博士前期課程（従来の修士課程）の推薦入学制度による入学試験を実施致しました。応用生物学コースで学んだ学生とは違うバックグラウンドを持った人材を広く募集するという趣旨で、大阪大学工学部在籍者や卒業生は受験資格が無いというユニークなものであります。昨年は14名、本年は9名の他大学出身者の応募があり、それぞれ2名ずつ合格致しました。これらの若い方々も、今後は同窓生として、教室の発展に大いに活躍してくれそうです。8月の中旬には、高校生のための教室見学会も行い、入学を希望する多くの高校生や父兄の方々に伝統ある我が教室を知って頂きました。

この100年の間に、教室の卒業生も、学部が2900名弱、大学院修士が700余名、博士が150名に達しました。21世紀はバイオの時代であるとも言われています。このようにたくさんの同窓生の皆様が、21世紀のバイオテクノロジーを担うべく、それぞれに、社会で御活躍をされていることを思いますと、非常に心強く感じます。

皆様、御忙しい日々を御過ごしのこととは思いますが、年1回の同窓会にはぜひ御出席を頂き、また、折に触れて母校もお訪ね下さい。同窓会が、世代を超えて、同窓の皆様を結び付ける核となり、皆様の人生とともに益々発展していくことを節に願っています。

記事 1

生活習慣病のテ - ラ - メイド予防（個々人にみあった予防）

博士課程昭和59年卒 高木 敦子

生活習慣病（成人病）の予防は健康で長寿のためには極めて重要な課題となっています。生活習慣病の予防には、まずその成因を解明することが必須です。私達は生活習慣病の中でも三大死因にあげられる心疾患の危険因子の1つである高トリグリセリド(TG)血症のうち、原発性IV型高脂血症の病因遺伝子は、血清TGを分解するリポ蛋白リパーゼ(LPL)遺伝子のヘテロ接合体（正常LPL遺伝子と機能不全LPL遺伝子をひとつずつもつ状態）であることを明らかにしました。この遺伝背景に負荷因子として、肝臓でのTG合成を促進する環境因子（アルコール多飲等）が加わった場合、高TG血症が発症します。負荷のない場合は、たとえ遺伝背景にLPL遺伝子ヘテロ接合体があっても、正常血清状態であり、高TG血症という心疾患の危険因子の1つをもつことから逃れられる事を意味しています。以上のことは、LPL欠損ヘテロ接合体者はLPL遺伝子正常者よりも、飲酒等の生活習慣に関しては厳格な注意をする必要があることを示唆しています。

生活習慣病が多発するいわゆる先進国において、理想的予防法である生活習慣を皆が一律に守ることは、なかなか困難な状況です。私達は上に述べた研究結果から、個人の遺伝背景からみた弱点（機能不全をもたらす遺伝子変異ヘテロ接合体）を中心に予防する方法が実際的で効率的であると考え、個々人にみあった予防法（テ - ラ - メイド予防；Tailor-made 注文仕立ての、ぴったりした）という概念に到達しました。

「己を知って、百歳危うからず」で、人生を最期まで健康でのりきっていききたいものです。

ヒトゲノム解析も進み、薬の副作用に対する個人差など、医療面においてもテ - ラ - メイド医療を行うことが患者さんのため、そして医療費削減のためにも有効であるという考えが広まり、それをサポ - トする技術も可能になってきている現在、個々人の弱点となる遺伝子異常の情報を基に、個人的に適切な予防というものを考えていくことが重要であると思っています。

記事 2 気質に関する一考察

昭和 56 年卒 奥田慶一郎

野球中継といえば巨人戦だった頃、父は森が嫌いだった。阪大に入った頃には兄が阪神ファンと化していた。79年のプレーオフの時、クラスの4割が近鉄ファンだと気付いた。バイトでプレーブス商品を扱っていたが全て黙っていた。普段どんなに温厚な人格者でも、野球ファンは、その時だけは危険な存在であり、近づいてはいけないと信じていた。

しかし太っ腹な人格者もいた。85年に阪神が優勝した時、社内でも有名なジャイアンツファンの人事課長に「これもひとえに巨人のおかげ」と二人の課長補佐が10万円相当の寿司を贈った。さすがに御本人は受け取らなかったが、周りの課員は幸せだった。二人は降格されることもなく「これがファンの本来の姿」と目からウロコが落ちる思いだった。

ちなみに85年には、学内でも祝賀パーティーが行われたが、あれから十有余年、現在の勢力分布やファン気質はどうなっているか、編集部との協力を得て現役教官にアンケートをお願いするとともに、東京でも同じ調査を行って比較してみた。主な結果は次のとおり。

- (1) 現役の最大勢力は阪神。次は巨人。他の在阪球団はマイナーになってしまった。
- (2) 殆どのファンはお祝いをする。阪神優勝なら年収の20%でもOKという豪傑もいる。
- (3) しかし、巨人ファンは、大阪でも東京でも例外なく、何もしない。不思議・・・。
- (4) なお、祝賀会については「敵味方の区別なく喜びを分かち合うのは良いこと」との声は4割に留まり「敗者側に回ったら悔しいので、いや」という回答が2割あった。

こうしてみると大勢はあの頃とそれほど変わらないようであり、一種の安堵感を覚える。そういえば、来年は20周年。阪神・近鉄で覇を競ってくれると好都合なのだが・・・。(注：筆者は野村ファンではありますが、阪神ファンではありません。念のため。)

KAIST との学生交流

大阪大学生物工学国際交流センター

昭和 38 年卒 吉田敏臣

いまだ夏たけなわといえる8月中旬、我が応用生物学専攻の学生が韓国の KAIST (韓国科学技術院) を訪問しバイオテクノロジーシンポジウムに参加した。今回参加した学生は大学院博士課程学生10人で、私と高木昌宏助教授と曾根岳史博士が引率教官として同行した。この交流会は、大阪大学応用生物(旧醗酵)工学専攻と韓国の KAIST 生物科学科両学科間における学術交流促進の一環として、両学科の大学院学生が2年ごとに相互訪問し、各自の研究成果を発表し討論を行うものである。10年前に第1回交流会として平成元年に日本側が韓国を訪問して以来今回で5回を数えることになっており、着実に恒常的行事に成長しつつある。

KAIST は韓国政府が科学技術振興のために特別に開設した高等教育機関であり、科学技術庁所管の理工学系大学院大学として1971年に創設された。現在は学部レベルの工学教育も行っており、韓国各地にある理工系高等学校とリンクして、韓国における理工系一環教育体制の中核をなしている。同大学は、設備充実のための特別な予算措置、学生の兵役免除など、文部省管轄の他の大学にはない特別な扱いを受けており、韓国でトップの超エリート校である。KAIST の生物学科には教授ならびに助教授合計20人の教官が所属しており、米国式の態勢でそれぞれが独立して教育と研究に携わっている。教育では、基礎生物学、化学、生化学、微生物学、分子生物学、工学基礎、生物化学工学、バイオメディカル、酵素工学、細胞工学、環境工学、食品工学分野の諸科目が用意されている。同学科は1997年までに161名の学士、567人の修士、174人の博士を出している。基礎研究では、生体物質の構造と機能、遺伝子発現、酵素反応、シグナル伝達、代謝制御、応用研究では、遺伝

子操作による新規医薬、食品、生理活性物質の開発、酵素工学、醗酵工学、細胞培養、食品バイオテクノロジー、環境バイオテクノロジー、新規バイオマテリアル、ドラッグデリバリーなどの研究が行われており、大阪大学の我が学科ときわめて類似した教育と研究を行っていることがうかがわれる。私は、KAIST 生物科学科の開設に参加した Dewey D. Y. Ryu 教授 (現カリフォルニア大学デービス校教授) のはからいにより、KOSEF (韓国科学財団) の招へいを受け、約 20 年前に約 1ヶ月滞在する機会を得た。そのときに知り合いとなった Rhee Joon-Shick 教授 (現 KAIST 理学部長) と相談してこの交流事業を始めることになった。同教授は非常に謙虚な方で常々大阪大学の我が学科を先方学科発展のための bench-mark にしているといっておられる。

この交流会は、参加者募集、プログラム編成、飛行機の手配などすべての準備と実行が学生の手によるものであり、ほぼ完全に学生の自主的活動といえる。研究成果発表のシンポジウム以外にも、交流パーティならびに KAIST (大田市) 周辺の史跡などを訪問する研修もあり、韓国の歴史や文化について学ぶことができる。このような交流会は、参加した学生にとっては、大変刺激になるもので、貴重な経験となっている。この行事に対して、我が醸造・醗酵・応用生物学教室同窓会が学科創設 100 周年を記念して開設した「学生国際活動支援基金」から補助金が与えられているが、その財政的援助が交流会の継続を可能にしているものであり、あらためて同窓生各位に感謝を申し上げたい。

大阪大学 - KAIST 合同シンポジウムに参加して

博士課程一年 小林肇

阪大工学部とKAISTとの合同研究シンポジウムが今年も行われた。このシンポジウムは韓国のKAIST大学院の生物工学専攻と我ら応用生物工学専攻が研究発表と討論を通じて国際交流を図るというもので、すでに当専攻にはお馴染みである。ご存知のように開催は交互に互いを母国に招待して行われ、今年は幸運にも韓国に招待される番だった。KAIST側との電子メールを用いた事前折衝により、本学から教官3名、学生10名の計13名が韓国へ渡ることになった。

1999年、8月16日に僕達はKAISTを訪ねた。シンポジウムはKAISTの生物化学領域センターのホールで行われた。KAISTの生物化学領域はメディカルバイオサイエンス、バイオエンジニアリング、ナチュラルバイオサイエンスの三分野に大きく区分されている。学生は進級する時点でどの分野に進むかを選択し、さらにその中のどの研究室に入るかを定める。また、研究室内でもアメリカ方式のシステムを採っており、教授、助教授、助手はそれぞれ独立してテーマを持ち研究活動を行っているようだ。自立自尊の精神というべきか、全ての選択は自身の考えで成され、全ての行為は自身の力で成される。その為かKAISTの学生たちはとてもアクティブで積極的だった。なによりも自分とその仕事に自信を持っていた。後で話してみても思ったのだが、彼らは自分たちが未来の韓国を担う人材であるという自負と誇りを強く感ながら世界に対していて、それがまた彼らの原動力ともなっているようだった。

KAIST側の演者達はアポトーシスや免疫系のような非常にホットなテーマから新素材の開発、作物の遺伝子改良など先導的な研究と幅広い分野に関する研究報告を流暢な英語で発表していった。発表者以外でもKAISTの人達は皆、英語がとても上手かった。なんでも

進級のための英語の授業がとても厳しいそうだが、それを彼らは確実に己のものにしていた。英語の能力は今更言う必要が無いほど重要だ。特に研究者にとっては論文を理解するスピード、学会等でのアピール度、留学先や外国人研究者とのコミュニケーションなど死命を決すると言っても言い過ぎではないと思う。KAISTの学生たちはその全てを難なくクリアして世界に飛び出してゆけるだろう。僕のようなものに関してはその全てに於いて律速となっている。当たって砕ける式で通じることは通じるが、所詮は片言レベルである。発表のときもそうだったが、お酒の席でも言いたいことも言えずまともな会話も出来ないで非常にじれったい思いをした。

しかしもちろん、日本側の発表も負けてはいなかった。我らが応用生物学専攻の演者達は見事に任務をこなしていた。各講座が誇るそれぞれの特色あるテーマがあるものは堂々と、あるものは多少つたなくとも英語で発表し、韓国への遠征目的を果たしていった。特に同行して下さった先生方のパワフルな発表は圧巻だった。勢いと迫力が場の空気を呑み込んでいて、いつも講義などで見ている先生方の百戦錬磨の研究者としての一面を垣間見た気がした。あまり言いたくないのだが、僕の発表であるが、もう完全に場の空気に呑まれきってしまった。嘔下され、十二指腸くらいまでは達していたと思う。僕の発表は昼の一番の予定だったが、このようなシンポジウムの常として予定が押ししており、一つ遅れて昼の二番目になった。途中休憩で学生食堂へ昼食をとりに行ったが、僕は情けないことに何も喉を通らなかった。しょうがないので水だけすすっていると向かいにKAISTの学生がやってきて、何も食べないのか、と聞くので「I am too excite, now」と答えたら笑われた。やたらトイレにばかり行っている内に昼休憩が終わり、前の演者の発表が始まった。当然そんなものは聞ける訳も無く、そわそわしている内に終わってしまった。僕は大きく息を吸って、吐いて、立ち上がって、演壇に立って向き直った。瞬間、月並みな言い方で恐縮なのだが、これ

以上適切な表現は無いので敢えて使わせて頂くが、頭の中は真っ白になった。原稿は結構覚えているつもりだったのだが、すべてはニューロンと活動電位の迷宮の彼方に消え去ってしまった。僕は大きく息を吸って、吐いて、一枚目のスライドをレーザーポインターで指しながらなんとか言葉を絞り出した。赤い光点が震えなかったのがせめてもの救いだった。それでも最初の方の原稿は脊椎からかどこからか知らないが口をついて出てきてくれた。しかし、後の方に進むに連れて言葉は枯渇し、体内温度は心臓を中心に急激に下がっていった。それなのに何故か汗はやたら出てきて、僕は手の甲で額の汗を拭って、未練を断ち切るつもりで原稿を席に置いてきた何も知らない5分前の自分を呪った。僕はやたら頭をかいたり息を吸ったりしながら、その場で英文を作ろうとした。しかし、どうしても舌が日本語の順番で英語を言うてしまうのだった。僕は青くなりながら何度も言い直して、その内自分でも何を言っているのか分からなくなった。そうして泥沼の中を進むように長く、また激流に押し流されるように短い十五分間は終わった、終わってしまった。当然質問など有るわけもなく、唾然としたような、ナイフで切り取れそうな沈黙の中で僕は立ち尽くした。その時、天使のようなKAIST側の座長が見かねて簡単な質問をしてくれ、僕はそれに答えることが出来た。席に戻るとどうなっているのかさらに汗が出てきて、僕はただただ恥じ入っていた。

次の日の夕方、合同シンポジウムの閉会パーティーが立派な焼き肉屋を会場に行われた。閉会の言葉の後、みんなでビールで乾杯をした。僕達は歓談しながら焼き肉を食べ、ビールを飲んだ。時々KAISTの教授の方々がこちらのテーブルにやってきて焼酎をついで回っていた。韓国流の作法なのか、KAISTの学生は教授から頂いた盃をすぐに一気に干していた。焼き肉屋の後、僕等は学生だけで二次会に行った。少し歩いて、KAISTの近くのモダンな店構えの飲み屋でビールを飲んだ。飛行機の都合でKAISTを明朝の五時に出発しな

ければならなかった。僕達は徹夜で飲み明かした。みんなでお互いの名前を覚えるゲームをしたり、また色々な事を妙に熱っぽく話した。夜明け前の紫色の空の下を、僕達はいい気分で少し感傷的になって歩いて戻った。KAISTの中の小川にかかる橋の袂でもう一度みんな写真を撮り、ほとんどの韓国の学生達とそこで別れた。握手を交わしながら、何を言っても言葉足らずな気がして「二年後に日本に来て下さい。きっと来て下さい。」としか言えなかった。彼らは本当にみんな優しく、親切だった。それに報いるにはどうてもい言葉では足りない。是非、日本に来てもらって、今度はこっちがとびきりのもてなしをする機会が来ることを願っている。ドミトリーへの道で日本の先輩達が「一度参加したら、今度も是非って気になるやろ。」また「こんだけ楽しめて、こんだけためになるのに。出えへん学生は絶対、損しとるで。」と言っておられたが、まことにもっともだと思った。

それにしても、僕はこのシンポジウムで恥を沢山かいた。英語でのプレゼンテーションはぼろぼろだったし、企画でも至らないところが沢山あった。しかし、思ったのだが、それでも英語は通じることは通じた。当たって砕ける式でもある程度はいけた。これなら勉強して努力すれば、KAISTの学生ほどにもなれるのではないだろうか、なりたい、勉強したい、と思った。本当に切実にそれを感じた。多分、同じ学生なのだからきっと出来るのだろう。でも、KAISTの人達と僕とでは決定的に違うところも有った。それは前述のような自分が未来を創る人材であるという自負だ。世界から期待されているという自覚と、人跡未踏の地へ、勇敢に航海しようという誇り高い勇気だ。今の阪大院生で、しっかりと自ら大学とその学生である自分を的確に自覚し、誇っている者はそういるだろうか。僕は今まで阪大の中にいて無駄に萎縮していたように思う。無駄に劣等感の井戸に落ち込みそれが美德のように感じていたが、それはただの怠惰さに過ぎない。もちろん慢心して天狗になってはいけませんが、僕

等はきっと世間からは期待されている部類の学生だと今は思う。全てに置いてナンバーワンの機関とは言わないが、常にそれを狙える恵まれたトップクラスの位置に居る。その事をきちんと認識して、それを原動力とし、誇りとして誠意を尽くすべきではないのだろうか。とKAISTの学生・韓国のエリート達を見て思った。合同シンポジウムの様子を僕の講座の教授に報告したところ「すぐに日本は抜かれるよ」と言っておられた。僕は抜かれたくない、KAISTの彼らと対等の友人でありたいと思う。当たって砕ける式でも通じることは通じるのである。僕ははっきり言ってかなり影響を受けやすい人間なので別かも知れないが、たった三日の合同シンポジウムでもこれだけ刺激を受けてしまうのだから、留学などしたらどれほどのことが分かるのだろう。優秀な阪大の学生達に当たって砕けるでもいいからどんどん世界に出ていってなにがしかを身につけてもらって、是非、日本が抜かれないようにしてもらいたい。自分で限界を決めなければ、きっとそれは成し遂げられるのではないかと思った。恥ならいつもかいているが、この合同シンポジウムではためになる恥のかき方をしたような気がしている。

大阪大学-KAIST合同シンポジウムを行うにあたり、応用生物工学専攻の各講座、ならびに同窓会から多大なる援助を頂きました。ここに厚くお礼を申し上げますと共に、今後とも皆様の御支援、ご指導の程を宜しくお願い申し上げます。

(小林君は現在根粒菌の共生に関する研究を行っています。)

(集合写真)
閉会パーティーの二次会です。誰が韓国人か日本人か、写真からでは判別できません。
中央の先生がKAISTの李教授です。



(唐辛子)
唐辛子。韓国では唐辛子のゲノム・プロジェクトが動いているそうです。それはより辛い唐辛子を創るためちゃうかという説もあります。



支援基金のお願い

同窓会では学科創立百周年を記念し、本専攻学生の資質向上を目指して「学生国際活動支援基金」をお願いいたしましたところ、多数の皆様からのご寄付を頂きました。本基金は学生および大学院生の海外での学会発表、海外学生との交流に使用致します。引き続き基金の充実を図りたいと存じますので、ご協力をお願いいたします。

一口 1,000円 (ただし端数でも可)

振込先口座番号：00920-5-83256

振込先加入者名：阪大醸造醗酵応生同窓会

通信欄に学生国際活動支援基金とご記入ください



大阪大学工学部 醸造・醗酵・応用生物学同窓会会則

- (名称)
本会は大阪大学工学部 醸造・醗酵・応用生物工学科同窓会と称する。
 - (会員の構成)
本会は次の会員で構成する。
 - (1) 正会員
 - イ 大阪大学応用自然科学科応用生物学コース、同大学大学院工学研究科、応用生物学専攻(以下教室と云う)およびそれらの前身学科、専攻の出身者。
 - ロ 上記イの教室および付則に示す関連講座の旧教官、現教官および現職員。
 - ハ 上記イの教室および付則に示す関連講座に關係のあるもの(旧職員、研究生、実習生など)で、入会を希望し会長が承認したもの。
 - (2) 名誉会員
会員の中から幹事会の推薦により總會の承認を得たもの。
 - (3) 賛助会員
本会の趣旨の賛同し、付則に定める会費を納めるもので幹事会の推薦により總會の承認を得たもの。
 - (4) 学生会員
大阪大学工学部応用生物学コースおよび同大学院工学研究科応用生物学専攻に所属する学生。
 - (目的)
本会は会員相互の親睦を図り教室の発展に寄与することを目的とする。
 - (所在地)
本会の事務所は教室内に置き、会員の希望により支部を設けることができる。
 - (役員)
本会には次の役員を置く。

(1) 会長	1名	正会員の中から總會で選出する。
(2) 副会長	2名	正会員の中から会長が推薦し、總會で承認する。
(3) 幹事長	1名	正会員の中から会長が委嘱する。
(4) 常任幹事	若干名	正会員の中から会長が委嘱する。
(5) 幹事	若干名	正会員の中から会長が委嘱する。
(6) 監査	2名	正会員の中から總會で選出する。
 - (役員の仕事)
本会役員の仕事は次のとおりである。
 - (1) 会長は本会を総理する。
 - (2) 副会長は会長を補佐する。
 - (3) 幹事長は常任幹事を総括して会務を掌理する。
 - (4) 常任幹事は庶務、財務、企画、編集の事務を行う。
 - (5) 幹事は常任幹事を補佐する。
 - (6) 監査は本会の運営と会計を監査し、總會に報告する。
 - (役員の任期)
役員の任期は2年とし再任を妨げない。
 - (会議)
 - (1) 本会は原則として2年に1回總會を開き、役員の変更、会計報告、会則の改正、その他重要な事項を議する。
 - (2) 總會の議決には出席正会員の過半数の賛成を必要とする。
 - (会計)
 - (1) 本会運営の経費は会費およびその他の収入を持ってあてる。会費は付則に定める金額とする。ただし、名誉会員および学生会員からは徴収しない。
 - (2) 本会の会計年度は4月1日に始まり翌年3月31日に終わる。
 - (会則の変更)
本会の会則は總會において出席正会員の三分の二以上の賛成を得て改正することができる。ただし、書面を持って賛否を表す場合は出席とみなす。
- 付則
- 大阪大学応用自然科学科応用生物学コース・同大学大学院工学研究科応用生物学専攻の関連講座とは、大阪大学生物工学国際交流センター、同大学工学研究科物質・生命工学専攻極限生命工学講座、同大学産業科学研究所生体応答科学研究部門生体膜分子工学研究部門およびその前身をさす。
 - 本則第9条の会費は次のとおりとする。
 - (1) 入会金 入会の際 5,000円。
 - (2) 会費 正会員は年額 2,000円。 賛助会員は年額 1口 5,000円。
 - 付則の変更は役員会の議をもって行う。
 - 本会則は平成8年11月15日から施行する。

同窓会現組織

会長	芝崎勲
副会長	嶋谷幸雄、 松中昭一
幹事長	菅健一
常任幹事	関達治、島田祐司、卜部格、福崎英一郎、岸本通雅 大政健史

会員の動向

(最近の動向がございましたなら、同窓会までご一報下さい。)

教官の移動

平成10年度

10月1日 福井希一(京大・農)(阪大・応生 教授に採用)
根来誠司(昭和52年卒)(姫路工業大学教授に転勤)

平成11年度

4月1日 室岡義勝(昭和41年修士卒)(生物工学国際交流センター長就任)

春木 満(東大・理)(学内講師に昇任)
片倉啓雄(昭和57年卒)(学内講師に昇任)

会員訃報

根来秀夫(昭和19年卒)平成11年7月
佐々木幹二(昭和29年卒)平成11年8月
今村武司(昭和40年卒)平成11年9月

平成11年3月卒業、修了生就職先等

学部卒業

・応用生物大学院進学

43名

・物質・生命大学院進学

5名

・就職、他大学進学、その他

奈良先端大学院、住友銀行、 研究生(阪大工学部物質生命)、研究生(阪大工学部応用生物)、阪大院医学系医科学専攻、森永乳業、白鶴酒造、サントリー、リクルート、大和証券、阪大院医学系医科学専攻、東京大学農学生命科学研究科

大学院前期課程修了

・大学院後期課程進学

9名

・就職、他大学進学、その他

フジッコ、サッポロビール、総合研究大学院大学大学院生命科学研究科後期課程進学、キューピー、日本ハム、江崎グリコ、明治乳業、サッポロビール、鐘淵化学工業、日本製紙、ハウス食品、住友製薬、アサヒビール飲料、東京大学分子生物学研究所・研究生、ハウス食品、明治乳業、江崎グリコ、京都大学大学院工学研究科後期課程進学、ハウス食品、日立ソフトウェアエンジニアリング、サントー、ニデック、富士製薬工業、中外製薬、カゴメ、江崎グリコ、ハウス食品、ヒガシマル醤油、日東電工、キューピー、昭和産業、住友製薬、興和、藤沢薬品工業

大学院後期課程修了

チューリッヒ大学ポストドク

大阪大学外国人研究員

フィリピン大学 University Researcher

煥

クラス会幹事（クラス会幹事の方には会員の所属の移動等について同窓会への連絡をお願いいたします）

昭和23年の幹事が以下のごとく変更されました。

新：佐瀬勝 旧：畠山脩

昭和7年	三輪大作	昭和36年	戸田廣良	昭和57年	片倉啓雄
昭和12年	森 太郎	昭和37年	菅 健一	昭和58年	森川正章
昭和15年	石井隆一郎	昭和38年	吉田敏臣	昭和59年	藤山和仁
昭和16年	武田六郎	昭和39年	藤田正憲	昭和60年	中嶋幹男
昭和18年	芝崎 勲	昭和40年	新名惇彦	昭和61年	大政健史
昭和19年	松本 博	昭和41年	関 達治	昭和62年	山本恵三
昭和20年		昭和42年	卜部 格	昭和63年	向 由紀夫
昭和21年	高岡祥夫	昭和43年	関口順一	平成元年	永尾寿浩
昭和22年		昭和44年	土戸哲明	平成2年	松本雄大
昭和23年	佐藤 勝	昭和45年	古川憲治	平成3年	鈴木市郎
昭和24年	野口祐一	昭和46年	山本忠行	平成4年	内山圭司
昭和25年	橋田 度	昭和47年	島田裕司	平成5年	滝口 昇
昭和26年	辻坂好夫	昭和48年	曾根良昭	平成6年	松浦友亮
昭和27年	松中昭一	昭和49年	小西喜朗	平成7年	永久圭介
昭和28年	檜作 進	昭和50年	中塚正博	平成8年	金谷 忠
昭和29年	嶋谷幸雄	"	東浦忠司	平成9年	小林 肇
昭和30年	大嶋泰治	昭和51年	溝口晴彦	平成10年	田中礼央
昭和31年	清井正好	昭和52年	根来誠司		
昭和32年	田端司郎	昭和53年	金子嘉信		
昭和33年	中桐義隆	昭和54年	高木 睦		
昭和34年	野本哲也	昭和55年	滝沢 昇		
昭和35年	森元英雄	昭和56年	阿野貴司		

年会費納入のお願い

会員各位：

拝啓、ますますご清祥のことと拝察します。
さて、下記記載の要領で平成12年度会費の納入をお願い申し上げます。

記

1) 郵便振替にて納入される場合

同封の払込通知票を用いて、最寄の郵便局にてお振込下さい。

(ご記入内容)

払込先口座番号：00920-5-83256

払込先加入者名：阪大工醸造醗酵応生同窓会

金額：2,000円

2) 郵便貯金口座自動払込を申し込まれる場合

最寄郵便局で自動払込利用申込書に必要事項を記入の上、お申し込み下さい。今後、毎年11月30日に貴口座より、年会費2,000円を自動引き落としさせていただきます。手続きの都合上10月15日までをお願い申し上げます。

(ご記入内容)

払込先口座番号：00920-5-83256

払込先加入者名：阪大工醸造醗酵応生同窓会

払込開始月：平成11年11月から

払込日：30日

払込の種別：会費

(注：昨年度すでに自動払込申込をされた方は新たな手続きは不要です。)

大阪大学工学部 醸造・醗酵・応用生物工学科

同窓会会報 第2号

平成11年9月15日 発行

印刷所 中西印刷

発行人 同窓会幹事長 菅健一(昭和37年卒)

〒565-0871

吹田市山田丘2-1

ホームページ <http://www.bio.eng.osaka-u.ac.jp/>

